

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

# 島嶼研だより

No.60

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2010年9月

## 主な記事

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの発足	p1
学生奮闘記「繋がるということ」(長井彩乃)	p2
フィールドこぼれ話「背中が痛いし、お腹はすくし」(野田伸一)	p6
連載 とうがらしに旅して 「おしりホカホカ」	p10

## 鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの発足

国際島嶼教育研究センター長 野田伸一

平成 22 年 4 月に鹿児島大学多島圏研究センターが改組され、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターとなりました。その前身は昭和 56 年から 7 年間存続した南方海域研究センターで、その後昭和 63 年から 10 年間存続した南太平洋海域研究センター、そして平成 10 年から 12 年間存続した多島圏研究センターです。

鹿児島大学は、本土最南端に位置する総合大学として、伝統的に南方地域に深い学問的関心を抱き続けてきており、多くの研究により成果をあげてきております。これまでのセンターが研究対象地域としてきたオセアニアおよび周辺海域は、オセアニアという言葉が海洋を意味することからもわかるように海洋が圧倒的な部分を占める領域で、さらにオセアニアの大部分を構成するミクロネシア・メラネシア・ポリネシアはネシアという語尾が示すように島々からなる海域世界です。センターではこのような領域を対象として、熱帯・亜熱帯の太平洋地域に展開する個々の島あるいは複数の島々が国家や地域を構成する、大陸とは異質の自然・

人間・文明上の特色を持つ空間に関する成果を蓄積してきました。

今回の改組は、鹿児島大学憲章に基づき、「鹿児島県島嶼域～アジア・太平洋島嶼域」における鹿児島大学の教育および研究戦略のコアとしての役割を果たす施設とし、将来的には、国内外の教育・研究者が集結可能で情報発信力のある全国共同利用・共同研究施設としての発展を目指すものです。これからも、島嶼域の問題について、本大学の資源を集中し先進的かつ統合的な教育・研究を推進するとともに、各研究成果を地域に還元します。

センターは本年度から開始する研究科横断的な教育システムでも主導的な役割を果たします。近年の学問の国際化・融合化により、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材が求められています。鹿児島大学では、これらの社会の要請に答えるための取り組みの一つとして大学院の教育目標に沿い、大学院を横断して体系的に履修するまとまりのある全学横断的教育プログラムが創設されます。プログラ

ムを受講することにより、総合的な理解力や専門分野で得た知識を生かす能力を養うことを目標としています。先ず、平成 22 年度後期より「島嶼学教育コース」が開講されます。鹿児島大学では、南西諸島からアジア・太平洋島嶼域を重視した様々な教育・研究を行っています。島嶼学教育コースではこれら島嶼に関する様々な分野の授業科目を履修することにより島嶼地域の様々な要請に応え、国際島嶼社会で

も活躍できる人材の育成を目指します。島嶼学教育コースの修了証を得るための必須科目では、実際に中之島（十島村）や硫黄島（三島村）にでかけて講義の一部を行う予定です。

12 年間センターを“たとうけん”と通称してきましたが、これからは“とうしょけん”となります。気分を新たに、鹿児島大学の構成員として教育・研究でさらなる成果をあげる所存です。

## 学生奮闘記

### 繋がるということ

ーフィジー・クミ村での体験からー

長井彩乃（鹿児島大学水産学部）

「ブラ」（こんにちは）の挨拶から私のクミ村での生活が始まった。黒色の肌に肉付きのよい体。日本人とは全く異なる容姿の村人たちが、初めて訪れる私を笑顔で迎え入れてくれ、人々の温かさに初日から感動を覚えた。たった四日間という短期間の滞在。その中で、言葉も文化も異なる者同士が心から通じ合え、笑いあえるという間柄を確立できるのだろうか。そんな心配はクミ村では必要がなかった。それが「カバ」と「タララ」の場。ヤングナの茎や根から作られる泥水のような飲み物「カバ」を飲み、続けて村人の歌声と演奏に合わせて「タララ」というダンスを見様見真似で踊る。飲んで踊り、踊って飲む。その繰り返しで 4～5 時間は続いた。どちらも私には初体験の出来事であった。途中で「もう飲めないのではないか」という思いがよぎったし、ダンスも 30 回程踊ればクタクタだった。しかし、飲むたび踊るたびに私にむかって「ビナカ」（ありがとう）の言葉と笑い声がとんできた。その笑顔と言葉を聞く度、疲れとは裏腹に嬉しさが漲り、村人との一体感を味わうことができた。このような感情を共有することが人と人との距離を縮める最短手段なのかもしれない。クミ村にカバとタララがあるように、日本でも人をもてなす時や、付き合いを深めてゆく時など酒を飲み、わいわい騒ぐといった習慣が見受けられる。日本やフィジーに留まらず他の国でもそうだ。そしてもう一つ。村では、やたらと挨拶が飛び交っていた。道ですれ違う人、遠くにいる人。気付けば家の中にいる人に対しても道端から「ブラ」と挨拶をしていた。またご飯を食べ終わり場を離れる度にその場にいる全員に「ビナカ」と挨拶をする。日本ではどうか。道端ですれ違って挨拶をしない若者、いただきます・ごちそうさまを言えない子供たち。日本で忘れかけられている挨拶の大切さ。今回の村での経験はコミュニケーションの取り方もそうだが日本での自分の姿勢を改めて考えさせられることが多かった。決して豊かとは言えないクミ村。しかしその中で根付いている人と人との繋がり、豊かな日本で忘れ去られつつある心の繋がり、大切さを私に沸々と感じさせるものであった。

---

 国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨
 

---

第 104 回 2010 年 4 月 26 日  
 フィジー人の自然認識とグローバル化への  
 適応—中部諸島の事例から—  
 河合利光  
 (園田学園女子大学)

フィジーは、かつて人と自然環境の共生する生命循環型社会であったと考えられるが、今では、西欧化・植民地化・観光地化・産業化の中で大きく変化し、南太平洋の中でも近代化の進んだ国として知られる。確かに、フィジーは、グローバル化の過程で大きく変化した国である。しかし、先住フィジー人自身は、フィジー流と西洋流を明確に区別している。ポストコロニアル論的立場に立つ研究者は、それを、伝統と現代の文化的断絶、及び他民族への抵抗や自民族のアイデンティの確認といった政治的視点から解釈する傾向があった。本論では、フィジーが、どのように、その変化に適応してきたかを考察するが、伝統と現代の断絶よりは両者の連続性を重視し、特に、先住フィジー人の社会・文化・自然環境をトータルに貫く「自然観」に注目する。本報告でいう「自然観」とは、両側ないし4つの側が支え合う、神により創られた「かたち」という、社会的に共有された文化的認識のことである。彼らは、人体、行動、社会、文化、自然環境を全て、差異化と支え合いによって生命力を循環させる伝統的で自然な「かたち」と考え、外来の不自然な形から区別している。それは単なる世界観という以上に、身体化され広く共有されている民俗理論であり、広く東南アジア・オセアニア地域にも共通する「文化」であると考えられる。さらに、その「自然認識」は、グローバル化に適応するために、フィジー人社会の基底にあった思考であると想定できる。

第 105 回 2010 年 5 月 17 日  
 日本の近代化と鹿児島  
 皆村武一  
 (前鹿児島大学法文学部)

わが国は、明治以降、政府の積極的な近代化政策によって、都市部を中心に近代的企業の発展、財貨・サービス市場、労働市場、金融市場の発展がみられるようになった。その近代化の波は次第に地方の農山漁村部にも押し寄せ、1890年代末には全国的な規模において近代化が進んだ。しかしながら士族人口が全国一の割合を占め、かつ農村・農民が圧倒的割合を占める鹿児島県においては近代化への歩みはのろく、全国平均から大きく後れをとってしまった。その主たる要因は、藩政期以来の制度・慣習や社会的諸関係が根強く残存し、農民の意識改革、生産技術の改良や生産性の向上が遅々として進まなかったためである。工業や商業の面においても、資金の不足に加え財貨・サービス市場、労働市場、金融市場等は遠隔地の都市部に依存しなければならず、近代的な企業といえるものは存在しなかった。政治や行政の面においては、官治的・保守的風潮が強かった。社会や文化の面においても、近代化は他府県の後塵を拝し、教育の面においても後進県であった。

第2次世界大戦後の農地改革、労働改革、教育改革などの民主化によって、本県も80年遅れた明治維新を迎えた、と称されるような状況を迎えたのである。このように、近代化が遅れたということは逆からみれば、自給自足的な農山漁村や家族労働力に依存した中小零細の企業や商業の占める割合が多く、商品貨幣経済の発展の度合いが低いということでもある。しかしながら、鹿児島においても近代化及びグローバル化は否応なしに進展している。近代化・市場経済化及びグローバル化の光の部分と影の部分について考えてみたい。

プレート境界の地下資源

根建心具  
(前鹿児島大学理学部)

岩石には、周期律表のすべての元素が含まれるが、地球の変動によって、特定の元素が、通常の岩石の含有量より、数倍から数万倍濃集することがあり、人類はこれを地下資源として有効利用してきた。地下資源の多くはマグマの活動によって形成されるが、すべてのマグマに地下資源が伴うわけではない。南方海域研究センター以来、幾度も総合調査隊に加わり、パプアニューギニアやパラウ、ヤップなど、太平洋西部地域の海洋プレートと大陸プレート境界に発達する島弧（弧状列島）を調査した結果、地下資源を伴うマグマの特性が次第に明らかになってきた。

南海研と多島研の総合調査隊では、生物学関係者と行動を共にすることが多く、自然現象を総合的に理解する好機に恵まれた。この経験は原始地球のプレート境界の地下資源、さらには太古代生物圏掘削計画の契機となり、原始地球の環境と生命の共進化の研究の足がかりとなった。

第 106 回 2010 年 6 月 14 日  
島あるいは火の山へ

吉増剛造  
(詩人・城西国際大学)

「島嶼研」にお招きいただきまして、ぜひみなさまに、御報告、—といいたいでしょうか、手紙をだすように、……そうでした、梅尾の明恵上人の「島の手紙」が枕になりますね、……「島への手紙を綴る試み」を、この日の一期一会として、幾本かの自作 Cine 上映を通じて、してみつもりです。

「島から半島へ、あるいは半島から島へ」というタイトル、ヴィジョンでもあるのかもしれませんが。

奄美大島、加計呂麻島、徳之島、済州島（チェジュド）から木浦（モッポ）へ、アイルランドの湖沼の島へ、そして、ポール・ゴーギャン、ブルターニュへと「島ノ歌」は、“波ノ音”のようにひろがります。

そして“鹿児島”が、（個人的にも、いわば、「共同幻想」に於ても）夢の起点でありつづけていることの謎も。そうか、火の山だ！

第 107 回 2010 年 7 月 12 日  
Tongan Political Reform: the Odd-One-Out among the Pacific Islands

イアン・キャンベル (Ian Campbell)  
(国際島嶼教育研究センター)

The constitutions of the Pacific Island states are mostly the product of decolonisation in the third quarter of the 20th century and capture the values that were current at the time. Several of them have undergone minor modifications since though usually without discarding the received constitution and redesigning the political charter from first principles.

Tonga is the exceptional case, having a constitution that is about 100 years older than those of the other states. It was formulated in 1875 by a non-Tongan, and showed almost no engagement with Tongan culture as it was at the time. On the contrary, the idea was to show that Tonga had moved away from its culture in its new political construction.

However, after having had over 125 years to assimilate culture and constitution by the end of the 20th century political pressures were making it necessary for some changes to be made. The 1875 constitution preserved a strongly hereditary element in government which gave stability, but which also encouraged the idea that king and nobles had a natural right to rule. Therefore, for about 20 years the regime was able to ignore or resist suggestions

that democratic reforms would be desirable or necessary.

The resistance to change ended abruptly as the aging king passed into a terminal decline, and power effectively shifted to the next generation. At that point, members of the royal family seized control of the reform process. Legislation was passed in 2010 broadening popular participation in government, and restricting the powers of the king. The changes will come into effect with an election in November 2010.

The effect of this reform is to create a constitution which is perhaps more intimately connected with Tongan culture than are the other constitutions of the Pacific, but also one which is much less democratic than might have been the case had reform been further delayed.

アジアの唐辛子  
—キダチトウガラシを中心に—

山本宗立  
(国際島嶼教育研究センター)

トウガラシ属 (genus *Capsicum*) は新大陸起源の植物で、紀元前 7000 年頃あるいはそれ以前から利用されてきた。1492 年にコロンブスが新大陸を発見して以降、100 年も経たないうちに唐辛子は世界中に広まった。現在ではトウガラシ (*C. annuum*) とキダチトウガラシ (*C. frutescens*) が世界中で利用されており、旧大陸においても「唐辛子のない食事なんてありえない」という食文化を築いた地域も多い。また、食用以外にも多岐にわたってトウガラシ属は利用されているが、そのような報告例は少ない。そこで、アジアにおけるトウガラシ属の利用を紹介するとともに、キダチトウガラシが新大陸から直接太平洋を経由してアジアへ伝播した可能性について発表をおこなう。

第 108 回 2010 年 9 月 21 日

Written in Stone: What the stone artefacts of an ancient archaeological site can tell us.

マリオン・キャンベル (Marion Campbell)  
(太平洋諸島考古学者)

Lapita is the term used for the earliest culture identified in the western Pacific Islands. Moreover, archaeological studies in the western Pacific, including Fiji have focussed on pottery analysis as the primary cultural marker. Analysis of stone artefacts has concentrated on adzes and on locating the source of their rock types. Similarly, sourcing of chert and obsidian artefacts as a means of tracing trade and population movements has received much attention. This approach has been adopted, in part, because most Lapita-period sites have been deficient in stone artefacts. A current trend is to move away from studies of individual artefacts and their form to concentrate on methods of production and resource strategies.

The early Lapita site at Bourewa, on the south-west coast of Viti Levu, Fiji, has provided a collection of almost 1700 stone artefacts which exhibit a wide range of types and attest to multiple activities occurring at the site. Detailed analysis of this collection has been under-taken combining the older approaches of classification and an assessment of production methods and resource utilisation. Over three-quarters of the flaked material has been either re-touched or has fine wear patterns that indicate the way it was used. Many pieces show multiple use and functions.

Analysis of the distribution of these artefacts from the site has identified focus areas for particular activities and changes through time. This is the first time that such an attempt has been made for a Lapita site and is especially important because at present Bourewa is accepted as the earliest occupation site yet discovered in Fiji.

## ～フィールドこぼれ話～

「背中痛いし、お腹はすくし」

—マイクロネシア連邦・ヤップ州：ファララップ島編—

野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

2008年に科学研究費による調査をマイクロネシア連邦ヤップ州ファララップ島で実施した。ファララップ島はヤップ本島から約90km東に位置するウリシー環礁の最も大きな島である。我々の調査では少ない予算で多くの分野の研究者が参加し、調査では住民の生活状況を総合的に把握する必要があることから、集落内に宿泊場所を確保する事になる。事前に打ち合わせをおこない、地元の有力者に宿泊場所の確保をお願いしていた。ところが、実際についてみると、宿泊する場所はありませんと言われてしまった。何が何でも宿泊場所と食事の確保をしなければならない。メンバーの粘り強い交渉が続いた。最初の候補は板の床に屋根があるが壁がないところであった。貴重品の保管さえできれば何とかなるとも考えたが、全員の意見はまとまらなかった。結局、その息子夫婦の家の一部屋を提供してもらえ事になった。5人が一部屋に寝るわけだから、ベッドなどは全く考えられない。コンクリートの床の狭く暑い部屋で5人が一緒に寝る事になった。初日・2日目は何とか床の固さがまんできたのだが、3日目あたりから辛くなってきた、きっと寝たきりになり床ずれになるとこんな感じなんだろうと思いながら長い夜を過ごす事となった。

もうひとつの問題は食事であった。マイクロネシア連邦政府の船“マイクロスピリッツ号”が毎月物資を運んできていた。この船の後継として中国から供与された船が使われていたが頻繁に故障して、定期的な物資の供給ができていなかった。さらに悪い事は重なるもので、国際原油価格の高騰で州政府が船の燃料を確保できなくなっていた。ファララップ島の店にあった食料は原油価格の高騰に伴って3倍の価格になった米とインスタントコーヒーだけであった。米は急激な値上がりで島の人が購入できなくて残っていたもので、この米を購入し何とか食事を作ってもらった。このときに助けられたのは非常用にヤップ島を出るときに購入してきたインスタントラーメン“サッポロ一番”であった。インスタントラーメンは日本人の偉大な発明であることを再認識した。マイクロネシアの島では多くの物資を島外に依存しており、原油価格の高騰は燃料と物価の上昇というダブルの打撃を与えていた。我々がヤップ島に戻るために乗った飛行機から修理を終え物資を運んできた船が入港する様子が見え、島の人が安堵する姿が目に見えた。



硬いコンクリートの床に耐えるメンバー

---

## 最近の出版物

---

(1) 国際島嶼教育研究センターの出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.31, No1, 2010

Research Papers

David Hanlon: Aloha for their violence: locating the NFL'S pro bowl within contemporary Hawai'i and the deeper Hawaiian past

Vina Ram-Bidesi: Employment opportunities for women in the tuna industry in small islands: is it really restrictive? A case study of Fiji Islands

Sota Yamamoto: Use of *Capsicum* peppers in the Batanes Islands, Philippines

---

## お知らせ

---

(1) 研究調査

国際島嶼教育研究センターでは「島はひとつの世界」という概念のもと、「多島域における環境変動に対する適応」および「小島嶼の自律性」の2つのプロジェクトを軸に、国内外の島嶼部で研究調査をおこなっています。

プロジェクト1: ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査

目的: ミクロネシア地域ではグローバリゼーションや気候変動の影響を受け、伝統的な社会の崩壊とともに自然・社会環境が悪化している。本地域の島嶼国は環海性・隔絶性・狭小性・分散性という地理的環境としての困難性を抱え、脆弱な経済からの脱却は容易なことではない。しかし、人々は先進諸国の政策に翻弄されながらも、誇りを持って生きており、その生活の多様性は尊重されるべきである。本研究の目的は、ミクロネシア地域における自然・社会環境の変化がどのように個人の生活に影響しているのかを明らかにするとともに、この地域の生活改善策の提言を行う。

調査地: ミクロネシア連邦ポンペイ州 (ポンペイ島、モキール島、ピングラップ島)

調査期間: 平成22年8月5日~9月8日

メンバー・調査内容:

野田伸一 (国際島嶼教育研究センター)

ポンペイ州における蚊の分布および住民による衛生管理に関する調査

長嶋俊介 (国際島嶼教育研究センター)

社会システムに関する調査

八田明夫 (教育学部)

ポイペイ島周辺に産する有孔虫群集の解析とその教育への活用

仲谷英夫 (理工学研究科)

ポンペイ島における地質学的調査

(8) 島嶼研だより No. 60

寺田竜太 (水産学部)

ポンペイ州における海草の植物相およびその環境に関する調査

河合 溪 (国際島嶼教育研究センター)

潮間帯に生息する貝類の貝殻多様性に関する調査

山本宗立 (国際島嶼教育研究センター)

ポンペイ州におけるトウガラシ属の民族植物学的調査



蚊の採集 (ポンペイ島)



モキール島



トウガラシ属のインタビュー調査  
(ピングラップ島)



海草調査 (ポンペイ島)



ミクロネシア短大の学長を表敬  
(ポンペイ島)



参加者 (ポンペイ島空港)



プロジェクト2：水産学部練習船「南星丸」を利用して、黒島学術調査

調査地：黒島

調査期間：平成22年5月18日-22日

メンバー：

野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

木下紀正（鹿児島大学名誉教授）

梁川英俊（法文学部）

寺田竜太（水産学部）

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

山本宗立（国際島嶼教育研究センター）



調査参加者の集合写真

## (2) 着任

平成22年5月1日付で山本宗立氏が准教授として着任しました。研究テーマは「トウガラシ属の民族植物学的研究」で、専門は民族植物学、熱帯農業生態学、栽培植物起源学です。また、外国人客員教授として南太平洋大学から Ian Campbell 氏が着任しました。招聘期間は平成22年5月11日～平成23年3月25日です。研究テーマは「トンガにおける政治改革の動き」で、専門は歴史学、政治学です。



ラオス南部で壺酒を飲む山本宗立准教授



イアン・キャンベル教授（右）と奥様のマリオン・キャンベルさん（左）

『とうがらしに旅する』

第一回 「おしりホカホカ」

最近妻に「辛い料理を食べるようになったね」と言われて気がついた。いつの間にやら僕もあの「刺激」の虜。研究材料には手を出すまい、と心に決めていたのに。とうがらしの辛さを量る単位に「スコヴィル値」というものがある。人が辛味を感じなくなるまでとうがらし抽出物を砂糖水に溶かし、その倍率を指標とする。それじゃあ辛さに慣れてきた僕が測定をするとスコヴィル値は低くなってしまふのか？という官能試験の曖昧さに直面する。でもそんなことはどうでもいい。とにかく、口は慣れてもおしりが慣れないのだ。調子に乗ってとうがらしを食べすぎると、次の日は「おしりホカホカ」を楽しむことになる。この話を友人としていたら、ホカホカの意味がよくわからない、と彼がいう。こうゆう輩は概して粘膜が強く、僕から言わせれば口もおしりも「鈍感」だ。もちろん何の科学的根拠もない。しかし、「おしりホカホカ」に耐性がある人は、唐辛子をたくさん食べることができるよう思えてならない。そこで、人の辛さに対するバロメーターとして「おしりホカホカ」度を提唱したい。皆様、辛いものが苦手といわず、とうがらしを口いっぱい頬張り、「おしりホカホカ」をぜひお試しあれ。実は辛いのがいける口かもしれません。

編集後記

『島嶼研だより』の編集を担当させていただくことになりました山本宗立と申します。『多島研だより』から『島嶼研だより』に変わったことを契機に、コラムをいくつか新設いたしました。フィールド調査における研究者の失敗談や冗談話など、普段なかなか聞くことのできない小話を「フィールドこぼれ話」に、現在フィールド調査をされている学生の熱き想いを「学生奮闘記」に、そして私の研究材料であるとうがらしに関する雑話を「とうがらしに旅する」に今後掲載いたします。校正・編集作業にまだ不慣れであるため、至らぬ点が多々あるとは思いますが、今後ともよろしく願いいたします。

(山本宗立)



屈託のない笑顔（ピンゲラップ島）

島嶼研だより No. 60 平成 22 年 9 月 30 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>